

No.2505

「イスラーム復興」から「公益」へ  
—現代中国におけるムスリム・マイノリティ回族による宗教復興運動の展開を巡る  
人類学的研究—

国立民族学博物館 外来研究員／日本学術振興会 特別研究員PD  
奈良 雅史

中国では改革開放以降、宗教政策が緩和され、宗教が急速に復興した。回族社会も例外ではなく、宣教活動などのイスラーム復興運動が活発化し、その一環で都市部を中心に、貧困地域の回族の支援を目的とした非政府的な公益活動も始められた。さらに近年ではそこに非ムスリム漢族の参加も見られる。

こうした状況を踏まえ、本研究では現代中国でのイスラーム復興運動を事例として、現地調査で得られたデータを基に、その活動が民族・宗教を越えた公益活動へと展開してきた過程を明らかにし、多民族・多宗教間での共同性のあり方を考察することを目的とした。

公益のあり方は、公益活動に関与するアクターの宗教的志向性、や民族の相違によって、それぞれ異なる。改革開放以降、回族社会では上述のようにイスラーム復興が進展する一方、伝統的回族コミュニティの解体によって世俗化も進展してきた。結果、回族の多くはムスリムとしての宗教性を必ずしも共有していない状況が生まれている。公益活動は敬虔な回族によってイスラームの発展を目指して始められた。しかし、この活動はそうした目標を共有せず、教育や経済的支援による回族という民族の発展を目指し、必ずしも敬虔ではない回族の関与により、その規模を拡大してきた。こうした公益活動は非ムスリム漢族とも部分的な利害の共有を可能にした。漢族たちは中国における貧困問題などへの対処を目的に活動に関わるようになった。一方で、敬虔な回族は漢族への宣教の機会と捉え、漢族の参加を受け入れていった。

以上のように、異なる志向性を持ったアクターによる同じ志向性の獲得ではなく、志向性が異なることに多民族・他宗教間の共同性の可能性が開かれている。但し、こうした共同性はどこまでも開かれたものではなく、緊張をはらんでいる。非ムスリム漢族の参加がより顕著になるにつれ、古参の回族たちの中には活動が単なるボランティア活動になってしまったととらえ、活動への関与を止める者も出てきた。今後、さらなるこの活動の変化の詳細を検討し、多民族・他宗教間の共同性について考察を進めていきたい。